

氏名	野寄 亜矢子 <small>のより あやこ</small>
学位の種類	博士（看護学）
学位記の番号	甲第 207 号
学位授与年月日	令和 5 年 3 月 3 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文の題目	看護師の自己教育性尺度の開発と看護師の自己教育性に関連する要因の検討
論文審査委員	主 査 藤田 優一 教授 副 査 和泉 京子 教授 副 査 清水 佐知子 教授

論文内容の要旨

【研究目的】

本研究は、第一に看護師の自己教育性の構成概念を明らかにすること、第二に看護師の自己教育性尺度を開発し、その信頼性と妥当性を検証すること、第三に開発した尺度の得点分布を可視化すること、第四に看護師の自己教育性と関連する要因を明らかにすることである。

【研究方法】

第一段階として看護師の自己教育性の概念分析を行い、構成された概念の属性の 5 要素〈看護への興味〉〈自信・充実感・安定性〉〈成長・発展の志向〉〈省察する力〉〈学習の技能〉に基づき先行研究を参考に質問項目を作成し 85 項目からなる看護師の自己教育性尺度原案を作成した。第二段階として看護教育専門家による内容妥当性、表面妥当性の検討を繰り返し行い、62 項目からなる修正版尺度原案を作成した。第三段階として全国の 300 床以上を有する急性期病院 22 施設の看護師 1,080 名を対象に修正版尺度原案について無記名自記式質問紙調査を実施し（第一次全国調査）、探索的因子分析を行い、同データを用いて確認的因子分析を行った。また、Cronbach's α 係数を算出し尺度の内的整合性を確認した。さらに看護実践の卓越性自己評価尺度得点、専門看護師や認定看護師の資格の有無、進学希望の有無、職業継続意思の有無の 4 指標を外的基準として基準関連妥当性を検証した。第四段階として関西圏内の一般病床 420 床を有する急性期病院 1 施設の看護師 100 名を対象に 3 週間の間隔を空けて看護師の自己教育性尺度について 2 回の調査を実施し、テスト・再テスト法による級内相関係数を算出した。第五段階として全国の 300 床以

上を有する第一次全国調査とは異なる急性期病院 78 施設に勤務する 5,636 名の看護師を対象に開発した尺度と看護師の自己教育性の概念分析で示された先行要件から抽出した関連要因について無記名自記式質問紙調査を行った（第二次全国調査）。尺度の基本統計量を算出し得点分布を可視化した。また、尺度総得点と下位尺度の得点を目的変数、関連要因を説明変数として単変量解析、決定木分析、重回帰分析を行った。

統計解析における有意水準は 5%とし、統計解析には IBM SPSS ver.28、IBM SPSS Amos ver.26 を用いた。本研究は武庫川女子大学研究倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号 20-71）。

【結果】

第一次全国調査は 416 名から回答があり（回収率 38.5%）、有効回答は 381 名（有効回答率 35.3%）であった。探索的因子分析の結果、看護師の自己教育性尺度として《自ら学ぶ力》、《省察する力》、《看護への興味と仕事の充実感》の 3 因子 27 項目からなる尺度が作成された。因子負荷量は.516 から.895 であり、抽出後の負荷量平方和の累積は 54.0%であった。Cronbach's の α 係数は尺度全体で.945、下位尺度の第 1 因子で.928、第 2 因子で.897、第 3 因子で.899 であった。級内相関係数は.714 から.865 であった（ $n=36$ 、 $p<.001$ ）。基準関連妥当性は看護実践の卓越性自己評価が高い群で看護師の自己教育性は有意に高く（ $p<.001$ ）、専門看護師・認定看護師の資格を保有する群でも有意に高い結果であった（総得点・第 1 因子・第 2 因子 $p<.001$ 、第 3 因子 $p=.045$ ）。確証的因子分析による適合度は GFI=.834、AGFI=.802、CFI=.912、RMSEA=.068 であった。

第二次全国調査では 1,510 名から回答があり（回収率 26.7%）、有効回答は 1,446 名（有効回答率 25.7%）であった。看護師の自己教育性尺度の総得点（平均±標準偏差）は 105.1±17.6 点であり、下位尺度得点別では《自ら学ぶ力》43.7±9.7、《省察する力》42.9±5.7、《看護への興味と仕事の充実感》18.5±4.7 であった。重回帰分析の結果、看護師の自己教育性尺度の総得点には「職場で役割を担うことに負担を感じる」が有意に負の関係であり（ $\beta=-.242$ 、 $p<.001$ ）、「看護師としての自分を応援してくれる家族がいる」（ $\beta=.128$ 、 $p<.001$ ）、「自分を認めてくれる上司、先輩、同僚がいる」（ $\beta=.126$ 、 $p<.001$ ）、「職場には、互いに刺激しあえる先輩、同僚がいる」（ $\beta=.132$ 、 $p<.001$ ）、「職場内での役割の有無」（ $\beta=.129$ 、 $p<.001$ ）、「チームで連携して仕事に取り組んでいる」（ $\beta=.099$ 、 $p=.001$ ）、「院内で行われている研修は学びやすい」（ $\beta=.110$ 、 $p<.001$ ）が有意に正の関係であった。

【考察】

本研究により看護師の自己教育性尺度として《自ら学ぶ力》、《省察する力》、《看護への興味と仕事の充実感》からなる 3 因子 27 項目の看護師の自己教育性尺度が開発された。開発された看護師の自己教育性尺度は、(1) 概念分析で示された看護師の自己教育性の 5 属性が全て含まれていること、(2) 成人学習者である看護師の主體的な学習プロセスを踏まえていること、(3) 先行研究で実証されている看護師の経験学習の重要性が反映されていることより、看護師の自己教育性を適切に測定できていると考える。

また、(1) 内的整合性が一貫して高く、(2) 再現性も高いことから信頼性の高い尺度であると言える。さらに、(1) 文献レビューおよび専門家によるチェックにより内容妥当性が高い項目で構成され、(2) 尺度の総得点および下位尺度得点が外的基準として設定した 4 指標の全てにおいて有意な関連をもち、(3) 確証的因子分析の結果は高いパス係数と一定の適合度を示していること、(4) 尺度開発とは別の大規模データでも妥当性が確認できたことから妥当性の高い尺度であると言える。また関連要因の検討から他者からの内省支援・精神支援、他者との社会的相互作用による学ぶ機会が看護師の自己教育性を高める要因であること、承認や役割付与は看護師の自己教育性を高める要因である一方で、低下させる要因でもあることが示された。看護師が生涯にわたり学び、看護実践能力を維持、向上していくためには、対話を重視しながら個々の看護師の能力や状況に応じた支援が求められる。

論文審査並びに最終試験の要旨

本論文は、看護師の自己教育性尺度を開発し、関連要因の検討を行っている。これまでは定義が明確にされていなかった「看護師の自己教育性」を定義づけ、適切な手順ののっとして尺度を作成し、その信頼性と妥当性の検討を行っている。

論文審査並びに最終試験で確認された本研究の主な結果は以下のとおりである。

1. 国内外の文献を資料として概念分析を行い、概念分析の属性から看護師の自己教育性尺度原案を作成した。また、原案作成の過程で、自己教育性と関連する諸概念の整理を行い、本研究で開発する看護師の自己教育性の尺度の範囲を明確にしている。
2. 看護教育を専門とする研究者や臨床看護師を対象に繰り返し調査を行い、尺度原案の内容的妥当性および表面妥当性の高い修正版尺度原案を作成している。
3. 地域別・病床規模別に層化抽出した全国の 300 床以上を有する急性期病院 22 施設の看護師 1,080 名を対象に修正版尺度原案について無記名自記式質問紙調査を実施し、探索的因子分析を行い、同データを用いて確証的因子分析を行った。また、信頼性と妥当性を検証した。調査では 416 名から回答があり（回収率 38.5%）、有効回答は 381 名（有効回答率 91.6%）であった。探索的因子分析の結果、看護師の自己教育性尺度として《自ら学ぶ力》、《省察する力》、《看護への興味と仕事の充実感》の 3 因子 27 項目からなる尺度が作成された。開発した尺度は Cronbach's α 係数により尺度の内的整合性が高いことが確認され、また複数の外的基準により尺度の基準関連妥当性が高いことが確認された。確証的因子分析の結果、設定した複数の適合度指標の一部は基準をわずかに上回っていたが、パス係数は高く因子構造において一定の妥当性は示されていた。
4. 急性期病院 1 施設の看護師 100 名を対象に 3 週間の間隔を空けて 2 回の調査を実施し

テスト・再テスト法による尺度の安定性を確認した。級内相関係数は高く、安定性が確認されている。

5. 尺度開発で用いたデータとは異なる標本を用いて（第二次全国調査）、開発した看護師の自己教育性尺度の妥当性評価を行った。地域別・病床規模別に層化抽出した全国 78 施設 5,636 名の看護師を対象とし、1,510 名より回収を得た（回収率 26.7%）。そのうち、有効回答 1,446 名（有効回答率 25.7%）を分析対象として探索的因子分析を行った結果、尺度開発と同様の因子構造が示された。また、基準関連妥当性、内的整合性も確認された。確証的因子分析では概ね許容範囲の適合度が示された。
6. 第二次全国調査の結果より、尺度の得点分布を可視化した。日本における看護師の自己教育性尺度の総得点および下位得点の得点分布が明示された。また、個人属性別の得点分布も示されている。
7. 第二次全国調査のデータを用いて、看護師の自己教育性尺度の総得点および下位得点を独立変数とし、概念分析で明らかにした看護師の自己教育性の先行要件に基づく個人および職場要因を従属変数として決定木分析と重回帰分析を行い、看護師の自己教育性と関連する要因を明らかにしている。

以上より、臨床現場での看護教育に使用できる、看護師の自己教育性尺度開発を試みた研究であると判断する。これまで看護師の自己教育に関する研究はなされてきたものの、成人学習者としての看護師の主体的、継続的な学習を踏まえた適切な尺度は存在しなかった。本研究は適切な手順に則って尺度開発を行っており、最終的に信頼性と妥当性の高い尺度を開発している。また、尺度得点を可視化して尺度の利用者が参照できる基準を示していること、看護師の自己教育性に関連する要因を明らかにしていることは、臨床における看護教育に直接的に寄与する成果である。本研究は看護師の現任教育に大きな貢献が成されるものと考えられ、学位の授与に値するものと判断する。

これらの論文の評価および、令和 5 年 2 月 5 日の公開発表会(最終試験)における質疑応答の的確性、及び看護学研究科委員会における合否判定に関する討議及び投票により、博士(看護学)の学位を付与するに値する論文と評価し、「合」と判定した。